

F22嘉手納配備延長

地元反発「暫定といえぬ」

米軍嘉手納基地は21日、1月から暫定配備されているF22戦闘機12機の派遣期間を当面延長すると発表した。F22部隊の兵員約300人だけを入れ替え、機体はとどまる。12機は当初4カ月間の予定で飛来していた。今回の派遣延長で嘉手納への「常駐」の様相が一層強まり、関係自治体の反発が出るのは必至だ。同基地は延長について「予算上の理由」と説明。

3月に発動した米国防費の強制削減への対応措置とみられる。米空軍は強制削減を受けて飛行訓練縮小などを実施。国防総省関係者は取材に「米本土での訓練が制限される半面、嘉手納のF22一時配備が長期化する可能性がある」と指摘していた。同基地は「より効率的な部隊派遣と空輸体制をもって日米同盟に対する米国の責務を示すことになる」と

の認識を示した。嘉手納飛行場に関する三市町連絡協議会(三連協)会長の富山宏嘉手納町長は「当初の予定をとづくに過ぎている。騒音被害が増えるだけでなく、機体トラブルなど危険性が増加する」と指摘。「暫定配備の長期化は常駐化につながる懸念があり容認できない。早期の撤収を求めたい」と述べ、週明けにも三連協で協議し、抗議する考え。

北谷町議会の宮里友常議長は「これだけ長期に居座るとなれば、もはや一時的配備とはいえない。米軍は自分の都合ばかり優先している」と批判した。